

故 岡田 千尋教授を偲んで

名古屋学院大学 商学部長 岡 本 純

約30年の長きにわたり名古屋学院大学商学部、大学院経済経営研究科教授として大学全体の発展に貢献された岡田千尋先生が2019年11月に召天されました。先生は2020年6月に名古屋学院大学名誉教授の称号を授与されました。以下では、岡田先生を偲んで先生との思い出、先生のご活躍の一部を紹介し、岡田先生の追悼号に寄せる言葉とさせていただきます。

私が学部長に就任した1年目の秋頃「迷惑をかけるから教務主任を降りて、早期退職していいか？」と研究室にお越しになり突然話しを始められました。教務主任はとにかく大学を退職したいというのはなぜだろうと考えながらも気の利いた言葉も見つからず黙って立ち尽くしていたところ、肺に問題があり時々講義を休まなくてはならず皆に迷惑をかけるからという理由でした。

次年度からの長期在外研究を楽しみにされており、研究活動に注力するための準備をされていると伺っていたので、「講義は他の教員皆でフォローできるし、せっかくのサバティカルですから1年ゆっくりしていただければよいので早期退職については考えず教員生活を続けてください。」とお話ししたところニコリと微笑み、「本当にいいんかいな？迷惑をかけてすまん。」と仰いました。それ以降は、治療以外の日々は勤務を続けられ、学会でもこれまでのご自身の研究成果をご報告されるなど、酸素ボンベを携帯されている点を除いては病気であることがわからないほど精力的に活動されていらっしゃいました。

岡田先生との出会いは、小生がまだ大学の専任教員として勤務していなかった約30年前に遡ります。恩師からの紹介で新しくできた学会（日本産業科学学会）に入会し、その学会でお話したのは岡田先生でした。小生にとって初めての学会報告で非常に緊張していましたが、「若手の報告の機会や研究業績を作るための学会であり、失敗するのは当たり前だから新しい分野にどんどん挑戦していけばいい。」とアドバイスを頂き緊張がほぐれたのを覚えています。また、縁あって小生が名古屋学院大学へ勤めることが決まり、大学組織についてそれほど理解していないのにも関わらず学部長を引き受けた際には、「1年だけでもいいなら俺がやってやるよ。」と快く教務主任もお引き受けくださいました。

これまでの教員生活を振り返ると、節目節目に研究や教員としての多くのアドバイスやお言葉を頂戴し言葉で言い表せない程感謝しています。

岡田千尋先生は、1991年4月に名古屋学院大学経済学部へ赴任され、92年商学部設置に伴い商学部教授として就任され主に商学総論などの商業系科目を担当されました。講義や演習では、理論だけではなく、ご自身で実際に商業施設や商店街を歩き回られて得られた研究成果をもとに学生に対して事例を挙げながらわかりやすく丁寧の説明をされていたのが非常に印象に残っています。

す。大学院でもその指導方法は同様であり、修士・博士課程の学生たちと学生たちが納得するまで議論し論文指導を夜遅くまで指導していらっしゃいました。

学会活動や社会活動としては、主たるものでは日本商業学会、日本産業科学学会、日本消費経済学会、日本流通学会、また通商産業省大規模小売店舗審議会特別委員、愛知県食の安全委員会など幅広くご活躍され、学会では評議員、理事、会長などの要職を歴任されました。

また講義や演習でお忙しいにもかかわらず、ラグビー部部長として学生たちを熱く見守っていらっしゃいました。毎夏、菅平での合宿に参加されラグビー部を強くしようと情熱を傾けられており、2019年に第68回全国地区対抗大学ラグビー大会で優勝した際もご自身がプレーヤーとして参加されたようにラグビーの魅力や素晴らしさを語られ、本当に喜んでいらっしゃったのが強く思い出されます。

大学では、そのお人柄から大学協議員、就職部長、教務部長、商学部長、大学院経済経営政策専攻主任、常任理事など数々の役職を歴任され、大学行政にご尽力されました。まさにMr.商学部というべき存在であり名古屋学院大学や商学部の発展を築いた人物のおひとりであったといっても過言ではありません。

先生は、言葉数もそれほど多くなくストレートな言動から一見すると怖そうに思えますが一言一言に重みがあったように感じます。常に的確な表現で他の人々を納得させリーダーシップを発揮されていました。一方で常に他人に対して気配りをされ、誰に対しても裏表なく接しておられ教職員や学生からも厚い信頼を得られていたと感じます。

最後の研究の道半ばで去られたのは非常に残念で、まだまだご教授いただきたいことが山ほどありましたが、それは今では叶わぬこととなってしまいました。これまで先生にお世話になった教職員は、先生からお教えいただいた研究や教育について深く心に刻み、改めてこれまで以上に学部が発展するように努力していきたいと考えています。どうぞ私たちをお守りください。